

# se douter の発話のしくみ

福田 由美子  
(関西学院大学大学院)

本発表では、*douter* に *se* を添える形式の機能を明らかにすることをめざす。

事態 *X* が生起する蓋然性を否定的にとらえていることを表すときには *douter de X / que X* を用いる。

(01) *Je doute de l'efficacité de ce remède.*

(02) *Je doute qu'il vienne.*

これに対して、*X* の蓋然性を肯定的にとらえていることを表すときには *se douter de X / que X* を用いる。

(03) *Elle se doute de la réussite de notre fils.*

(04) *Je me doute qu'il viendra.*

(05) *Je me doutais bien qu'il téléphonerait.*

このように、*se* を添えることによって、*X* に関する蓋然性の評価が *douter* をもちいた発話とは反対の方向になるのは、周知のことである。従来の *se* に関する説明には、「*se* は主語と同一指示である」、「*se* は、動詞の表す行為に対する主体の強い関与や自己投入を示す」、「発話主体は、行為者であると同時に受益者である」などがあり、*se douter* をもちいた発話のしくみに関しては、Stéfanini (1962)、Franckel (1990)、曾我 (1999) などが説明を試みているが、いずれも不明確な点がある。

本発表では、*douter* の語源から出発して、*douter / se douter* の用法の変遷(現代フランス語における両者の使い分けに関わりがある)を辿り、さらに、インフォーマントの協力を得て *se douter* の使用実態を検討し、*se douter* を用いる発話のしくみの解明に努める。